どんなになっても

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どんなになっても

【Ｎコード】
Ｎ０８９２Ｋ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
クアラルンプールのモハマド氏は無類の猫好きである。その為様々なトラブルが起こるがそれでも。猫の話です。

第一章

どんなになっても

アブドル＝モハマドはクアラルンプールに住んでいる。ごく普通のサラリーマンである。

マレー系独特の浅黒い肌と人懐っこい大きなはっきりとした目が目立つ。中々の美男子であり大学を卒業して早速美しい妻を手に入れた。

性格は円満で会社での成績もよかった。しかしであった。

彼は少し人の噂になることがあった。それは何故かというと。

「また頬に傷があるな」

「そうね、またね」

「額にまで」

皆彼の顔にある傷を見てヒソヒソ話をするのだった。自分の席で真面目に仕事をしているアブドルだったが周りはそうはなっていなかった。

「あの傷は一体何なんだ？」

「あれかしら」

ＯＬの一人がここで言った。

「奥さんと喧嘩して」

「それで夫婦喧嘩で引っ掻かれた？」

「そういうこと？」

「だってしょっちゅうあるじゃない」

このことも指摘された。

「あっちが消えたらこっちが消えだし」

「それであんなに傷があるのかね」

「だからなのかしら」

「そうじゃないかしら」

そのＯＬは首を傾げながらこう言うのであった。

「夫婦喧嘩の結果なんじゃないかしら」
「いや、それはどうかな」
しかしここで眼鏡をかけた男が言ってきた。
「それは違うんじゃないかい？」
「違うんですか？」
「モハマドの奥さんはとても大人しい人だよ」
眼鏡の男はこのことを言うのだった。
「とてもね。大人しくて何があっても怒らない人だよ」
「それじゃあ」
「それにだよ」
眼鏡の男はさらに言うのだった。
「モハマドが誰かと喧嘩するような人間かい？」
「それは」
「ちょっと」
「そうだろ。彼は誰かと喧嘩をする様な人間じゃない
続いて彼自身について言われるのだった。
「それはね。とてもね」
「じゃああの傷は一体」
「何なのかしら」
「それはわからない」
眼鏡の男もこう言うしかなかった。
「けれどしょっちゅう傷をしているのは確かだね」
「顔だけでなく手の平だって」
「いつも幾つも傷あるし」
「本当に引っ掻かれたみたいな」
「何だろうね」
その傷の理由は誰にもわからなかった。しかしであった。
彼の傷は尽きない。一つが治れば三つ出て来るといった具合にだ。
そんな有様であった。
その彼が家に帰ると。家はクアラルンプール校外の一軒屋である。

そこにようやく買えたのである。そこに帰った彼を玄関で出迎えたのは。
「ウニャアア！」
「ニャア！」
「フギャア！」
奇怪な鳴き声とその主達だった。彼等は早速彼に飛びかかってきた。
「ああ、只今」
彼は笑顔で彼らに応える。見れば猫が一気に十匹程度彼にまとわりついてきたのである。隣の国のシャム猫もいればトラ猫もいるし黒猫も白猫もいる。色々な猫がいた。
彼は猫達をまとわりつかせたまま家の中に入り。笑顔で挨拶をするのだった。
「只今」
「おかえりなさい」
彼と同じ様にマレー系の顔をした若く美しい女が家の奥から出て来た。見れば彼女の周りも十匹程度の猫達が集まっている。
「もうすぐにわかったわ」
「猫達の声がしたからだよね」
「そうよ。それじゃあ晩御飯ね」
「うん、それで」
「今できたところだから」
それはもうだというのである。

第二章

「食べましょう。鶏肉を焼いたのよ」
「鶏肉をかい」
「それと野菜のカレーよ」
メニューはそれだというのである。
「あと猫達は」
「キャットフードかい？」
「いえ、お魚よ」
それだというのである。
「お魚なのよ」
「お魚なのかい」
「実家から随分多く送ってくれたのよ」
妻はその事情を彼に話してきた。
「だからね」
「そうかい、それはよかったね」
「私達が全然食べないようなのをね」
そうした魚だというのだ。
「ほら、日本人が食べるみたいな」
「ええと、鰹とかそういうかな」
「そうよ。あとはエイだったかしら」
「あの平べったい魚かい」
「そういうのを送ってくれたのよ」
確かにこの国では食べられない魚である。マレーシア、いや東南アジアでは日本人が好んで食べる魚が本当に猫の餌にしか過ぎないのである。
「色々とね」
「じゃあ餌には困らないね」
「ええ。他にもね」

「他にも？」
「干物も送ってくれたし」
それもだというのである。
「それもね」
「干物もかい」
「そうなのよ。やっぱり日本人が食べるお魚をね。もう適当に干して」
「何か随分適当に作ったみたいだね」
「何でも日本人がそこに来て如何にものの欲しそうに見ていたらしいけれど」
そうしたこともあったのだという。
「そういったこともあったらしいわ」
「日本人がかい」
「エイとか鮫を捨てるのなら是非くれとも言っていたらしいわ」
「日本人は鮫も食べるのか」
アブドルはそれを聞いてその目を思わず丸くさせてしまった。ただでさえ丸い目が余計に丸くなってしまったのである。そうなってしまったのだ。
「それはまた」
「日本人って凄いわね」
「いやさ、シャハラ」
「ええ」
妻の名前である。それが彼女の名前だというわけだ。
「それってないんじゃないかな」
「鮫を食べるってこと？」
「鰹やエイもわからないよ」
それもだというがさらにであった。
「けれどさ。鮫までって」
「他にも何か鰭に毒がある危ない魚とか蛸まで欲しがってたそうだよ」

「何でも食べるのかい？」
「そうみたい。日本人はね」
「わからないな。日本人はどうなっているんだ」
こう言って思わずぼやくのであった。
「全く。そんなものを食べて」
「少しどころじゃなくおかしいわよね」
「完全におかしいよ」
アブドルは首を捻りながら述べた。
「いやさ、それはね」
「私もそう思うけれどね」
「それでも日本人はなのかい」
「そんな変な魚を好んで食べるのよ」
そうだというのである。
「本当に美味しそうにね」
「そうしたところはルック＝イーストとはしたくないな」
しみじみとした口調になって述べるアブドルだった。ルック＝イーストとはかつての首相マハティールが提唱した政策である。日本をモデルにして成長しようということだ。アブドルはそのこと自体は賛成であったがその他のことにはどうも賛成しかねるのである。
「それはね」
「そうなのね」
「そんな変な魚はね」
「猫の餌だけでいいっていうのね」
「全くだよ。日本人は何でまた」
その日本人の嗜好についての言葉が続く。

第三章

「そんな変な魚ばかり食べるのかな」
「美味しいって言うけれど」
「それがわからない」
彼にはとにかく全くわからない話であった。
「全くね」
「そうよね。まあとにかくね」
「当分猫の餌には困らないね」
「それはね。ただ」
「ただ？」
「また砂を用意しないと」
シャハラはまた困った顔になって述べた。
「おトイレのね」
「ああ、それだね」
「砂も用意しないといけないし。あとは」
「ははは、他には何もないじゃないかい」
「あるわよ」
今の夫の能天気な言葉にはむっとして返してきたのであった。
「ちゃんとね。あるわよ」
「あるっていうのかい？」
「そうよ、あるじゃない」
言いながら家の壁を指差す。するとそこは研いだ跡がはっきりと残っている。それを彼に指し示したうえでさらに言うのであった。
「あれ、見えるわよね」
「うん、見えるよ」
その研いだ跡を見ながら言うアブドルだった。
「ちゃんとね」
「じゃあわかるわよね」

「そうだね。板でもつけておくか」
「そうしないと家中研ぎ跡だらけよ」
シャハラはうんざりとした顔で夫に述べた。
「本当に。もうそうなってるけれど」
「困ってるんだね」
「はっきり言ってね」
その通りだというのである。
「かなりね」
「ううん、それだったらね」
「板を貼っておいてね」
「そうしようか。じゃあそれは僕がやっておくから」
「ええ」
「君は何もしなくていいよ」
微笑んで妻に言うのであった。
「そのことはね」
「そうさせてもらうわ。けれど」
「けれど？」
「今何匹いるのかしら」
猫の数についても話が為された。
「一体どれだけの数が」
「四十匹はいるよね」
「そうよね。一応全部去勢とか不妊手術はしているけれど」
流石にそれはしておくのであった。これ以上子供までできては面倒が見切れないのは流石にわかっていたからである。捨てるという選択肢はなかった。
「それでもね」
「まあいいじゃないか。猫は宝だよ」
「宝なの」
「そうさ、宝だよ」
屈託の無い笑顔で言うアブドルだった。

「幸せを呼ぶ生き物なんだよ」
「それ誰が言ったの？」
「さて、誰だったかな」
そう言われると首を傾げてしまった。
「一体全体」
「それはわからないの」
「けれどまあいいじゃない。ちゃんと養ってるんだし」
「まあそれはね」
「君にも猫達にもひもじい思いはさせないよ」
そのことはしっかりと言うのであった。
「何があってもね」
「それは頼んだわよ」
「じゃあ晩御飯にしよう」
あらためて妻に言うのであった。
「是非ね」
「ええ、それじゃあね」
こうして夫婦水いらずとはいかず猫達に囲まれながら食事を摂るのであった。そして寝る時もだ。夥しい数の猫達に囲まれてベッドの中で眠るのであった。

第四章

そうした日々が続いている。それだけでアブドルの身体の傷は増えていく。猫は引っ掻き噛み付くものだからである。そしてある日のことだ。

彼はその顔に大きな傷を付けて出社してきた。その傷は。

「あれっ、あの傷って」

「そうよね。どう見ても」

「猫の」

左の頬を猫の一匹に噛まれたのである。しかもそれだけではなかった。

顔中に引っ掻き傷がある。これで誰もがわかった。

「猫を飼ってるんだな」

「しかもかなり凶暴なのを」

「そうみたいね」

それがわかったのである。遂に彼等もだ。

「成程、だから今までの傷は」

「それでだったんだな」

「成程ね」

皆このことを知って納得した。彼のこれまでの傷のことをだ。

それを聞くとであった。こう答える彼であった。

「いや、猫はいいよね」

「いいってやっぱり」

「飼ってるんですね」

「そうなんだ。もう猫がいるだけで幸せだよ」

妻を語るのと同じだけ嬉しそうな顔での言葉であった。

「本当にね」

「それで何匹だけ？」

「一匹だけですか？」

「それでどんな猫なんだい？」
「四十匹だったかな。いや」
するとであった。こう返す彼だった。その言葉は幾分か考えるものになっている。
「もっといたかな」
「もっとって」
「四十匹以上も？」
「この前増えたんだよ」
こんなことも話してきたのである。
「実はね。また二匹増えたんだよ」
「またって」
「じゃあ一体何匹なんですか？」
「確か四十四匹だね」
それだけの数の猫がいるというのである。
「まあ妻の実家からマレーシア人が食べない魚を送ってくれるし砂は海岸で幾らでも手にはいるしね。お金には困っていないしね」
「困っていないっていっても」
「四十四匹って」
「凄い数だけれど」
「何匹いてもいいじゃない」
彼は気さくというよりも能天気に話すのだった。
「猫はね」
「いや、それでもその数は」
「もうかなり」
「物凄いんですけれど」
「だから何匹いてもいいじゃない」
あくまでこう言う彼だった。
「猫はね」
「そんなに好きなのかい、猫が」
「そこまで」

「猫は幸福の使者だよ」
今度はこんなことを言うのである。
「本当にね。猫はね」
「やれやれ、これは本物だな」
「全く。じゃあ家は今頃」
「猫屋敷か」
「猫が一匹でも減ったら寂しくて」
また言うアブドルだった。
「仕方ないよ。本当にね」
「本物の猫好きだ」
「ええ、これは」
皆そんな彼に呆れるばかりであった。そしてである。生き物は集まるところに集まるのだった。四十四匹では済まなかったのである。
シャハラはある日猫達を見てあることに気付いた。
「あれ、まただわ」
「またなのかい」
「そうよ、またよ」
休日で家にいる夫に対して返す。見れば彼は猫達と一緒に遊んでいるところどころにまとわりつかれたり噛まれたりして大変なことになっていた。
「またなのよ」
「やれやれ、またなのか」
「そうなのよ。一匹野良猫が来てるわ」
中に一匹だけ首輪をしていない猫がいた。しかもそこには名前がない。
「またね」
「そうか。それだったな」
「飼うの？」
「ここに来たのもアッラーの思し召しだよ」
イスラム教徒として相応しい言葉ではあった。ただ今回ばかりは

かなり彼にとって都合のいい言葉にしか聞こえないものではあったが。
「だからね。いいじゃないか」
「やれやれ、またなのね」
シャハラは夫のそんな言葉を聞いてまずは呆れた声を出した。

第五章

しかしであった。それは一瞬で。すぐに笑ってこう言ってきたのである。

「それじゃあこの子の名前はどうするの？」

その首輪のない灰色の如何にも凶暴そうな猫を指し示して言う。

「この子の名前は」

「そうだな。イポーにするか」

「イポー？」

「うん、その名前にしよう」

こう言うのである。

「それでどうかな」

「まあ名前については何も言わないけれど」

妻はそれはいいというのである。

「街の名前ね」

「今度はそれでいくと。もう名前も随分使ってるしね」

「数字に十二ヶ月それぞれの名前に季節の名前に」

「他には花も木も使ったしね」

流石に四十四匹もいればそれだけ名前の種類も使う。そういうことだった。

「だからね」

「それで都市なの」

「これでどうかな」

あらためて妻に尋ねるのだった。

「この名前で」

「さっきも言ったけれどそれには何も言わないわ」

またこう言う妻であった。

「それにしてもまた一匹増えるのね」

「いや、新しい家族だよ」

「これで四十五匹なのね」
「このまま五十匹になればいいね」
アブドルは笑いながら能天気な言葉を出した。そのうえで棚のところに向かいまだ使っていない首輪を出してである。そこに名前を書いた。
そしてそれを新しく名付けたイポーに着けようとする。しかしであった。
イポーはすぐに彼から逃げ回る。首輪をされるのが嫌なのだ。
「あっ、こら待て」
「待ちなさない」
彼だけでなくシャハラもその猫を追う。それを見て他の猫達も騒ぎ出し家の中は忽ちのうちに大騒ぎとなってしまったのである。
騒ぎ声も聞こえてだ。家の中は大混乱に陥った。猫達は騒ぎを起こしたと見たアブドルに飛び掛ったりもした。そうして引っ掻かれたり噛まれたりするのだった。
「どいてくれ、とにかく首輪をしないと！」
「そうなのよ、だから大人しくして！」
「フギャアアアア！」
「ウニャアアアア！」
大騒ぎであった。こうして二人は傷だらけになってその猫に首輪をするのであった。そうして翌日その生々しい傷跡で会社に行くとであった。
「またこれは壮絶な」
「戦争にあったみたいな」
「生きているのが不思議だけれど」
「いや、昨日は大変だったよ」
しかし当人は全く何でもないといった顔である。
「本当にね。また一匹新しく来てね」
「また一匹ですか」
「じゃあ今は」

「四十五匹だよ」
それだけの数になったというのである。
「今はね」
「四十五匹」
「完全に猫屋敷じゃないですか」
「ははは、そうだね」
その猫屋敷という言葉に笑顔になるアブドルだった。
「確かにね。猫屋敷だよ」
「それで何でそんなに大怪我を」
「猫にやられたんですよね」
「そうだよ」
まさにそうだと返す彼だった。その言葉には何の嫌味も影もない。
「それがどうかしたのかい？」
「いや、どうかしたらじゃなくて」
「あのですね。無茶苦茶じゃないですか」
「大丈夫ですか？」
「大丈夫だよ」
かなりの怪我なのは明らかだがこう言うのである。

第六章

「別にね」
「何でそう言えるんだよ」
「全く」
「全くって。猫いいじゃない」
だからだというのである。
「猫と一緒にいればそれだけで幸せにならない？」
「ならないよ、そんなの」
「幾ら何でもね」
「そこまでいたら」
それぞれ話す彼等であった。彼等にとってみればそれだけの数の猫がいるだけでも想像のできないことである。しかもそれだけではないのだ。
「おまけに。凶暴みたいだしな」
「そういうの見たらね」
「どうにも」
「いやいや、それがまた可愛いんだよ」
そうだというのである。アブドル本人はだ。
「やんちゃをするところがこれまたね」
「やんちゃ・・・・・・」
「そのレベルで」
「そうだよ。やんちゃじゃない」
あくまでそれだと言う彼であった。
「それしかないじゃない」
「そうなんだ。それって」
「幸せなんだ」
「そうだよ。僕は本当に幸せだよ」
猫に囲まれたその生活がだというのだ。

「妻もいるしその妻だってね」
「猫が好きだから」
「それでなんですか」
「さて、子供ができたら」
このことも考えているのであった。この辺りは彼もとりあえず人間であることがわかる。
「その子供もね」
「その子供も？」
「どうするんですか？」
「猫好きにするよ」
そうするというのである。
「絶対にね。いや僕の子供だから絶対にそうなるね」
「やれやれ。これは」
「処置なしですね」
「全く」
そんな話をしながらアブドルを見るのであった。その幸せな彼をだ。そしてこのやり取りから数ヶ月経ってから。これまでになく全身傷だらけになって出社してきたのである。
「やあおはよう」
「おはようって」
「その傷は一体」
「何が」
「何がってどうしたんだい？」
アブドルは驚く皆に対して笑いながら言葉を返すのだった。そうしながら自分の机に向かってそこに座る。本当に何事もなかったかの様にだ。
「いい朝じゃない」
「いや、その身体だけれどな」
「今日は特に」
「ズタズタじゃないか」

「聞いてくれよ、遂に五十匹になったんだ」
その彼等に対して屈託のない声をかけるアブドルだった。
「遂にね。五十匹にね」
「五十匹」
「そこまで増えたんですか」
「そうだよ。まあ流石にこれ以上は無理かなって思うけれど」
五十匹をメドとしているのであった。それは確かにきりのいい数字ではあった。

第七章

「それでもね」
「それでもですか」
「それでその身体は」
「いやあ、一匹の尻尾を踏んづけてしまってね」
そうしたというのである。
「その猫が大暴れしてね。他の猫もそれで暴れて」
「それでか」
「それだけの傷が」
「そうなんだよ。いやいや本当に」
何でもないといった言葉がここでも出されていく。
「困ったよ」
「困ったどころじゃないだろ」
「そこまで傷受けたら」
「もう」
「女房もね、ちょっと引っ掻かれてね」
シャハラの話もするのだった。
「僕程じゃないけれど」
「しかし。五十匹もいて暴れたら」
「それこそ大変なことになるんですね」
「大変？何が？」
そういった言葉には相変わらずの返答の彼だった。
「何が大変なの？」
「大変って。そんな傷していたら」
「それはもう」
「全然？何で大変なの？」
また言うアブドルだった。何とでもないようにだ。
「それで」

「それでって」
「あの、その傷じゃ」
「もう幾ら何でも」
「ははは、こんなの何でもないよ」
顔も首筋も腕の至る場所も噛まれた跡や引っ掻かれた場所があってもである。全く平気なのだった。そんなことは一切気にせずに言うのである。
そしてだ。その彼の言葉はだ。
「それでね」
「うん、それで」
「どうしたんですか？今度は」
「いや、いい話が来たんだよ」
こんなことも言うのだった。
「日本のテレビ局がね」
「日本の？」
「あの生のお魚食べる？」
彼等の日本への認識にも魚が出て来た。どうしてもそれは切り離せないのであった。
「あの国から」
「来たんですか」
「家の猫達を取材したいってね」
そんな話が来ているのだという。
「いや、有り難いよね」
「有り難いって」
「それもですか」
「そうだよ。有り難いよ」
心から嬉しそうに言った言葉であった。
「うちの猫達を見てくれるんだからね。本当にね」
「そうか。そんなにか」
「嬉しいんですね」

「嬉しいよ。さて、それじゃあ」
意気軒昂な声での言葉であった。
「また今日も帰ったら可愛がらないとね」
そんなことを言って楽しそうな顔になる彼であった。彼は今幸せであった。例えどれだけ傷だらけになろうとも。彼は最高の幸せの中にいるのであった。愛する猫達に囲まれて。

どんなになっても　　完

２０１０・１・１２

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0892k/

どんなになっても

2010年10月8日15時23分発行